

第 45 回 公益社団法人 日本看護科学学会 学会総会 議事録

日時 2025 年 12 月 6 日（土）16 時 50 分～17 時 45 分

場 所 朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター マリンホール

議 長 酒井郁子

配布資料 第 45 回学会総会議事次第

出席者：132 名

I. 開会

定款変更に伴い、学会総会での議決は行わないが、事業の進捗や報告、論文表彰の実施など、会員との情報交換の場として引き続き学術集会開催時に実施することが説明された後、第 45 回公益社団法人日本看護科学学会総会が開催された。司会は吉沢豊予子副理事長、記録者は國江慶子氏（東京都立大学）が務めた。

II. 理事長挨拶

酒井郁子理事長より以下の挨拶があった。

日ごろより本学会の活動を支えて下さっている会員の皆様に理事会を代表し御礼申し上げます。現在、本学会は様々な課題に直面している。「研究者・実践者が世代を超えて本学会に長く関わり続けたいと思える学会であり続けられるか」もその一つである。学会は研究成果を発表する場であると共に、次の世代にバトンを渡していく場でもある。会員の皆様が一人ひとり学会に担い手として参加できることを目指していきたく、運営の方針を具体化したいと考えている。

従来、日本看護科学学会はこの時期の社員総会で次年度予算の承認を得た後、学会総会で報告していたが、社員総会での予算審議は法令上必須ではなく、現在、理事会の決議を経て組織外のコンサルティングを活用し、検討を反映させた予算を 2 月の理事会で検討した後に内閣府に提出する予定である。予算は 6 月の定時社員総会で報告することとなったため、本日の学会総会では次年度予算の報告はないことをご了承いただきたい。

III. 報告事項

定款 44 条に従い、議長に酒井郁子理事長が指名されたのち、会場スクリーンに投影されたスライドに示された内容をもとに以下の説明がなされた。

1. 理事長のビジョンと運営方針

酒井理事長より、所信表明として以下の説明がなされた。

1) 看護科学の発展を支える学問の自由とガバナンス

問いを立てる自由、議論する自由、批判と再構築の自由があり、看護科学は発展し本学会も発展してきた。しかし自由は自律的なガバナンスがあって支えられる。ガ

バランスは、自由な探究を次世代に手渡すための未来志向のベースとなるものと考えている。

2) 自由な探究を支える連携と相互補完による学会活動

学会の理事会、委員会の活動をインターディシプリナリーな活動、専門領域が協働し新しいものを生み出す組織にしていく。

3) JANS の特質

看護学「全体」を扱う学会である。看護科学は何のために発展するのかという、会員の皆様に共通する目的 (Common Purpose) が必要と考えている。

4) JANS が共有すべき Common Purpose

定款第 2 条の目的の共有とともに、看護学発展を忘れないことが必要である。個人・コミュニティ・地球のあらゆる場において営まれる生老病死が、より安寧なものとなり、人が尊厳をもって生きることができる環境が将来にわたって保たれるよう、そのプロセスと支援のあり方、成果を科学的に明らかにすること、併せて、気候変動が健康と医療に及ぼす影響を重要な研究課題と位置づけ、持続可能な社会と UHC (ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ) の実現に貢献することを今期の Common Purpose としたい。

5) 今期理事会のミッション

JANS を多様な立場や知が出会い、互いに問い直し、支え合いながら深まっていくような、ひらかれた議論の場とする。このことによって、本学会が現場と研究、社会と学術を行き来する「信頼の回路」として機能することをミッションとしたい。

6) 理事会の活動目標

今期のミッションを実現するための活動目標として以下 2 つを掲げた。

目標 1 開かれた議論の場としての継続可能性の確保する

目標 2 社会と学術、実践と研究と教育の信頼の回路を機能させる

2. 委員会のミッション

黒河内総務担当理事より、会場に投影されたスライドに基づき、以下の各委員会が、会務分掌に基づき継続して活動を行うことが説明された。

1) 和文誌編集委員会：日本看護科学会誌の編集・発行

(投稿規程、ガイドライン等の見直し、迅速査読制度と著者要件変更の評価、編集委員、査読委員の活動支援と投稿数の向上等)

2) 英文誌編集委員会：Japan Journal of Nursing Science の編集・発行

(プロモーション活動の実施、インパクトファクターの向上、迅速査読を含む投稿数増加に対応する査読システムの整備 JJNS セミナー等)

3) 表彰論文選考委員会：優秀論文の選考と表彰を通じた研究奨励

(表彰論文と学術集会演題の選考、公開、表彰を実施等)

- 4) 研究・学術推進委員会：学会としての研究推進戦略の策定と支援
(会員の看護学に関する各種研究の推進を支援等)
- 5) 看護ケア開発・標準化委員会：看護ケアに関するエビデンスの蓄積と標準化の
推進。臨床実践の質向上への貢献
(臨床現場や他の関連団体との連携強化に向けた施策の立案・実施・評価等)
- 6) 若手研究者活動推進委員会：若手研究者の活動促進、未来の看護学を創造・想像
する土台の構築
(若手セミナー・研究発表機会の創出等)
- 7) 国際活動推進委員会：国際的な連携・発信の推進、看護学の国際活動の推進
(若手の国際学術ネットワーク強化（メンターシップの推進）等)
- 8) 看護学学術用語検討委員会：看護学術用語の整理と標準化、看護が扱う専門用語
の概念的統一
(電子システム JANSpedia による看護用語公開、新たな用語の追加等)
- 9) 社会貢献推進委員会：看護学の社会的実装・貢献活動の推進と次世代育成の基盤
形成、看護学を広く発信し、看護学の研究活動を通して人々の健康と医療、福祉
に貢献
(学会声明や提言等の策定意見発出時の協働、市民向け啓発活動の実施等)
- 10) 看護倫理検討委員会：看護実践・教育・研究における倫理的課題の検討
(看護学およびその周辺領域における倫理的課題の整理・対応等)
- 11) 利益相反委員会：学会活動における COI（利益相反）の管理。役員、委員、投稿
者や発表者を対象とした COI の実施と評価
(COI ポリシーの策定・運用・評価等)
- 12) 研究倫理審査委員会：会員の研究活動に対する倫理審査
(倫理審査体制の整備・運営・評価等)
- 13) 災害看護支援委員会：災害発生、復旧、復興、準備における会員の研究等の支援
(発災時の会員向け調査と研究支援、看護系学会との連携により災害時活動内容を
検討等)
- 14) 若手国際化・研究助成委員会：若手会員の国際的活躍と研究助成の支援
(海外研修・発表支援制度の整備、若手助成金選考のための選考基準及び選考方法
の確立・実施評価、若手向け研究助成金の運用等)
- 15) 会則等委員会：会則および諸規定の整備と運用管理
(規則・規程の見直しや改訂、新設規程の立案、他委員会からの照会対応等)
- 16) 総務委員会：学会の基盤運営を担う。
(理事会・総会等の運営補助、会員情報管理、入会審査、各委員会の横断的支援
等)

3. 第48回日本看護科学学会学術集会長の選任報告

黒河内総務担当理事より、第48回（2028年度）日本看護科学学会学術集会長として、布施淳子氏が選任されたことが報告された。

IV. 質疑応答

鈴木会員より、本年8月15日付けの『日本看護科学学会における研究活動にかかる不正行為への対応（以下、規程8）』に基づく研究不正告発書の提出および不正告発の扱いと告発書を要請書として扱ったこと、（予備）調査委員会を立ち上げたかどうかについての質問があった。酒井理事長より、9月28日付けで回答書を送付し、10月30日の第84回日本公衆衛生学会総会のシンポジウムで本会の公式見解を述べ、本会のウェブサイトと同じ公式見解を掲載した。本会としては、当該論文に関し特別調査委員会を立ち上げ、査読プロセス等の再調査を行ったが不正はなく、そのような疑義はPI及び所属研究機関に対し申し立てることが文部科学省や国際基準に相当すると考えており、その見解は変わらないことを説明した。また、告発書を要請書に変えた認識はなく、学会として特別調査委員会において2019年2月から調査が行われ、その結果を確認し、公正であると判断したため、改めて予備調査委員会の立ち上げの必要はないと判断し、研究機関が検討することと認識していることが説明された。日本公衆衛生学会総会のシンポジウムに登壇した横田理事より、シンポジウム内で回答した内容は、日本看護科学学会の公式見解と一致していること、鈴木氏に当該論文の研究機関に申し出るよう伝えたことが回答された。

なお、司会の吉沢副理事長、および議長の酒井理事長より、学会総会の予定時間を超過しており、全体のプログラムに影響するため、質疑の時間に区切りをつけることが説明された。

V. 表彰

表彰論文選考委員長の荒尾晴恵理事より、第24回学術論文優秀賞1名、第24回学術論文奨励賞2名を紹介した。3名の受賞者より受賞の挨拶があった。受賞論文は以下となる。

【優秀賞】濱谷雅子氏

論文題名：

無作為化比較試験による訪問看護師向け在宅看取り教育プログラム（PENUT）の有効性の検討

【奨励賞】友岡史沙氏

論文題名：

Effectiveness of a preceptors' social support program to aid novice nurses' error experience on preceptors' skill and novice nurses' perception of social support: A quasi-experimental study.

【奨励賞】 牟田みや子氏

論文題名：

Development of an e-learning program for biofeedback in pelvic floor muscle training for adult women using self-performed ultrasound: An observational study.

VI. 第46回日本看護科学学会学術集会会長 挨拶

第46回学術集会会長 西村ユミ氏（東京都立大学）より、以下の挨拶とプロモーションビデオ放映があった。

第46回日本看護科学学会学術集会は2026年12月11・12日に東京国際フォーラムで開催する。ポスターデザインは、東京都立大学インダストリアルアーツ学科の学生の応募作品の中から企画委員会が選考した。学生によると一つ一つのパズルの色を変え、形を変えデザインしたとのことであった。地域で生活する一人ひとりに個性があること、看護職一人ひとりも違うことを大事にしながら一緒に仕事をし、さらに多様な職種と一緒に社会を守っていく、多様な職種・業種・市民一人ひとりが支え合うことを大事にした学会にしたいことを伝え、制作されたデザインである。

学会テーマは「ケアで社会をつくる」である。ケアの研究が社会をつくっていくことを第46回学術集会では実現していきたい。現在の社会は競争する社会になってきている。競争するだけでは安定した暮らしを成り立たせることができない。ウサギはカメをおいていかない、カメは、途中で寝てしまったウサギを追い抜かすときにウサギの肩をたたいて一緒にいく、そんな社会を実現することをイメージし企画している。

東京開催は新型コロナウイルス感染症のパンデミックがあり急遽オンラインの開催となった2020年以来である。是非、東京国際フォーラムにお集まりいただき、2020年に実現しなかった、東京での再開を実現していただきたい。企画委員一同お待ちしている。

VII. 閉会

閉会前に鈴木氏より質疑が再開されたが、他会員から「他の学会員も本件の経緯などを十分に理解できていない状況もあるため、この場ではなく期を改めていただきたい」との意見があり、了承された。

最後に司会から本日の出席は132名であるとの報告があり、以上をもって、第45回公益社団法人日本看護科学学会総会を閉会した。

以上

この議事録が正確であることを証するため、議長により以上の議事を認める。

2026 年 1 月 29 日

議 長 酒井 郁子